

運動有能感を高める体育科学習の在り方

ーeポートフォリオを活用した自己評価とフィードバックを通してー

体育科において、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することが重視されている。しかし、運動に親しむ児童が近年減少している。

そこで本研究では、eポートフォリオを活用して自己評価とフィードバックを行うことによって、運動有能感を高める体育科学習の在り方を明らかにすることをめざした。

具体的には、eポートフォリオを活用して、児童に自分の動きを自己評価させ、記録・整理した自分の動きや自己評価を基に仲間や教師、保護者がフィードバックを行った。

その結果、運動有能感は高まった。特に、運動有能感を構成する三つの因子のうち、身体的有能さの認知と受容感に作用することがわかった。運動領域に関わらず統制感に作用するには、運動の構造的特性を踏まえて適切な課題解決方法を選択できるよう工夫した上で矯正のフィードバックを行うことや、記録の伸びだけでなくフォーム等の改善を重点として肯定的フィードバックを行うこと、記録の伸びをより認知できる工夫をした上で肯定的フィードバックを行うことが必要であることがわかった。

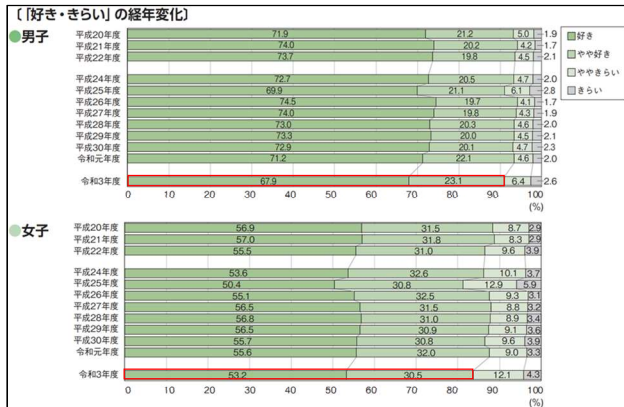
福岡市教育センター長期研修員
福岡市立別府小学校 山下 広晃

1 主題について

(1) 主題設定の理由

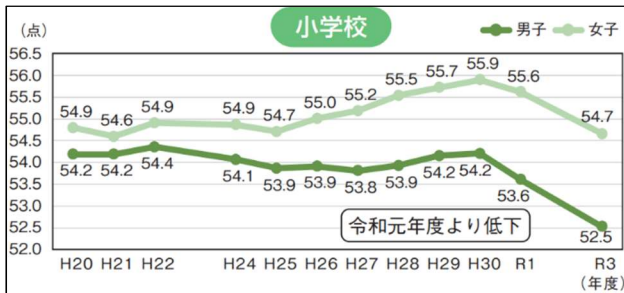
① 国の動向から

「小学校学習指導要領」（2018）における体育科の目標では、「心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成すること」が重視されている。しかし、「令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」（2021）において、運動やスポーツをすることが「好き」「やや好き」と答えた児童は平成25年度に次いで低く（【資料1】）、全国的に運動に親しむ児童が減少しているといえる。

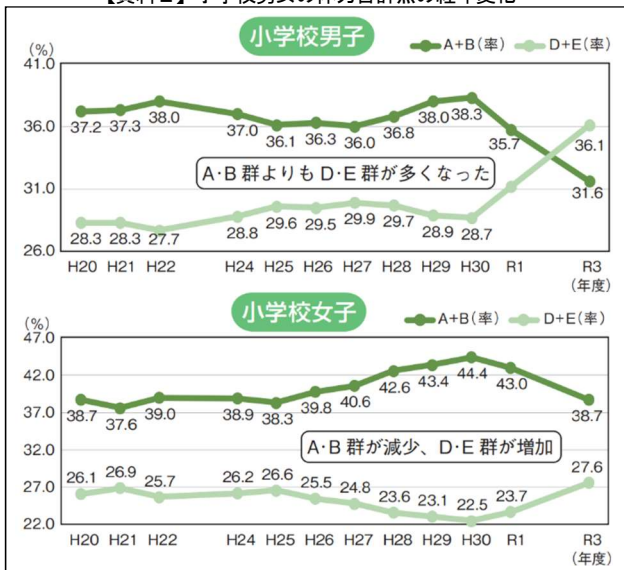


【資料1】運動やスポーツへの愛好度の経年変化

また、児童の体力合計点は男女ともに低下し（【資料2】）、総合評価においては、男女ともにA+B群が減少、D+E群が増加しており、D+E群の割合は過去最大となっている（【資料3】）。

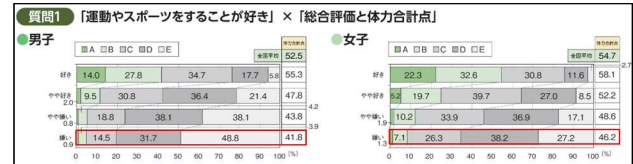


【資料2】小学校男女の体力合計点の経年変化



【資料3】小学校男女の総合評価の経年変化

さらに、運動やスポーツをすることが「好き」と答えた児童ほど総合評価と体力合計点が高く、「嫌い」と答えた児童ほど総合評価と体力合計点の低い（【資料4】）ことから、運動やスポーツに対する意識と体力は密接に関わっており、体育科の目標を達成するためには、運動やスポーツに対する意識を高める必要があることがわかる。



【資料4】「運動やスポーツをすることが好き」と「総合評価と体力合計点」のクロス集計

② 福岡市の教育の動向から

第2次福岡市教育振興基本計画(2019)では、教育の目標となるめざす子ども像を「やさしさとたくましさをもち ともに学び未来を創り出す子ども」としている。それを実現するために「健やかな体の育成」を施策の一つとし、「これからの時代を拓く、たくましい子どもを育成するため、『遊び』をキーワードとして運動習慣の基礎を培い、運動に親しむことを通して、体力向上の取組みを推進」していくと述べている。

③ 福岡市の児童の実態から

福岡市「令和3年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査について」（2022）によると、体育授業が「楽しい」と回答した福岡市の小学5年生の男女の割合は、平成31年度と比較し減少しており（【資料5】）、一週間の総運動時間が「0分」「1～59分」と回答した割合が全国平均に比べて大きい（【資料6】）。

	小5男子	小5女子
平成31年度	75.1	58.8
令和3年度	72.5 (↓2.6)	57.4 (↓1.4)

【資料5】体育授業が「楽しい」と回答した割合（%）（R3全国体力調査結果より作成）

	小5男子	小5女子	中2男子	中2女子
全国	8.8	14.5	7.4	17.8
福岡市	9.2 (↑0.4)	16.0 (↑1.5)	9.5 (↑2.1)	22.0 (↑4.2)

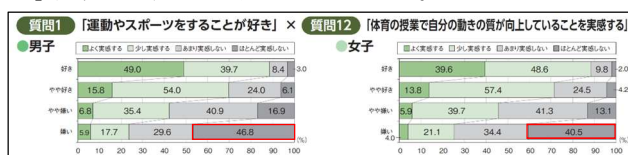
【資料6】一週間の総運動時間が「0分」「1～59分」と回答した割合（%）（R3全国体力調査結果より作成）

また、「各学校での取組み」として、「運動やスポーツをすることが好きな児童生徒の育成を目指した体育授業の実施」や「ICT 機器を効果的に活用した授業の工夫・改善の実施」、「運動の楽しさを実感し、工夫しながら運動する習慣の定着につながるような、家庭等への働きかけ」等を挙げている。

①～③を踏まえ、これからの体育科学習を考える上でのキーワードとして運動有能感に着目した。Klint ら(1987)は、「スポーツで有能さを認知する人は参加を積極的に続けようとするだろうし、逆に有能感をもてない人はスポーツへの参加が続かなくなるだろう」と述べ、運動やスポーツに積極的

に参加する児童を育てるには、運動有能感を高める必要があることを示唆している。

「令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果」(2021)でも、運動が嫌いな児童ほど、体育の授業で自分の動きの質が向上していることを実感しておらず（【資料7】）、運動有能感が低いと考えられる。



【資料7】「運動やスポーツをすることが好き」と「体育の授業で自分の動きの質が向上していることを実感する」のクロス集計

以上から、運動に親しみ、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成するために、運動有能感を高める体育科の学習の在り方を明らかにしていくことが必要と考え、本主題を設定した。

(2) 主題及び副主題の意味

① 運動有能感とは

岡澤ら（1996）が提唱した運動場面における自信である。これは、運動が上手にできる自信である「身体的有能さの認知」、努力すれば、練習すればできるようになるという自信である「統制感」、教師や仲間から受け入れられているという自信である「受容感」の三つの因子で構成されていることが示され、運動有能感測定尺度（【資料8】）を用いて測定するものとされている。

因子	質問項目
身体的有能さの認知	1 運動能力がすぐれていると思います。
	2 たいていの運動は上手にできます。
	8 運動の上手な見本として、よく選ばれます。
	10 運動について自信をもっている方です。
統制感	3 練習をすれば、必ず技術や記録はのびると思います。
	4 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います。
	11 少しむずかしい運動でも、努力すればできると思います。
	12 できない運動でも、あきらめずに練習すればできるようになると思います。
受容感	5 運動をしている時、先生がはげましたり、応援してくれます。
	6 運動をしている時、友だちがはげましたり、応援してくれます。
	7 いっしょに運動しようときそってくれる友だちがいます。
	9 いっしょに運動する友だちがいます。

【資料8】運動有能感測定尺度の質問項目

② eポートフォリオとは

ポートフォリオをデジタル化したものである。体育科においては、撮影した児童の動きや、それを評価したものを記録・整理したものである。

③ eポートフォリオを活用した自己評価とは

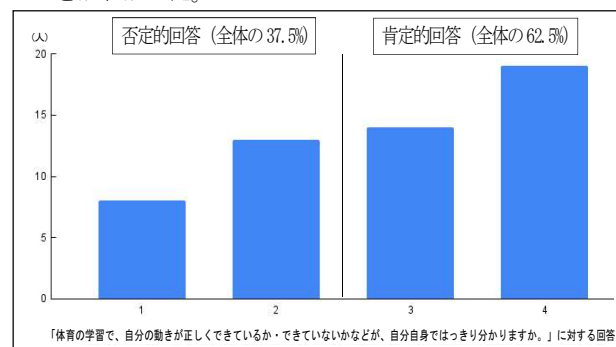
eポートフォリオを用いて児童が自分の成果や課題を判断し、学習を調整する材料にすることである。

自己評価について、田中(2008)は「子どもたちが自分で自分の人となりや学習の状態を評価し、それによって得た情報によって自分を確認し今後の学習や行動を調整すること」と述べている。

体育科においては、自分の感覚のみを基にするのではなく、動きを撮影して記録したものと、手本となる写真等や過去の自分の映像を比べて、動きの局面ごとに自分で成果や課題を明らかにし、その解決方法や次の課題を決める材料にすることが考えられる。

実践を行う5年生の児童は、これまで自分の動きを動画で撮影する等して自己評価してきているが、体育に関する事前

アンケートにおいて、自己評価を適切にできていると思うかを4段階評価させた結果、否定的回答をした児童が37.5%あり（【資料9】）、適切に自己評価ができているとは言えないことがわかった。



【資料9】体育科での自己評価に関する事前アンケート結果

運動場面における自己評価について、大後戸（2010）は「運動学習において、運動技能を習得したり、パフォーマンスを向上させるためには、学習者自身が技能レベルやパフォーマンスの結果を適切に自己評価することで運動の修正を図る必要がある」と述べており、自分の技能レベルやパフォーマンスの結果を適切に自己評価することが運動有能感を高める方法の一つとして有効であると考えられるが、ICTを活用した自己評価方法が運動有能感に与える影響については明らかにされていない。

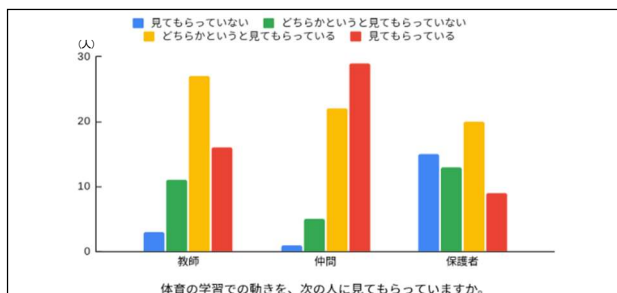
④ eポートフォリオを活用したフィードバックとは

eポートフォリオを用いて他者が児童の動きを見て、成果や課題、解決方法を伝えたり称賛したりすることである。

フィードバックについて、田中(2010)は「効果的な行動を実現するために、自分の行動がもたらした結果をデータとして取り込み（フィードし）、次のより適切な行動のために活用するシステム」としている。また、高橋ら（1991）は、適切な行動に対する称賛を意味する「肯定的フィードバック」、運動技能に対する修正を示す「矯正的フィードバック」、不適切な行動に対する叱責や批判等の「否定的フィードバック」と分類しており、高橋ら（1989）は、肯定的・矯正的フィードバックと意図された学習成果には正の相関関係があることを明らかにした。

体育科においては、児童の課題を解決するために、教師や仲間が児童の動きを直接見てフィードバックを行うだけでなく、eポートフォリオとして記録された動画と手本となる動きを示した写真等を見比べてフィードバックをすることが考えられる。また、学校外においても、保護者が児童のeポートフォリオを基にフィードバックをすることも考えられる。

実践を行う5年生の児童は、体育に関する事前アンケートの結果、保護者からフィードバックを得た経験が少ないことがわかった（【資料10】）。



【資料10】体育科でのフィードバックに関する事前アンケート結果

フィードバックと運動有能感の関わりについて、上江洲ら（2011）、外山ら（2015）は、運動場面において、教師や学習者相互、もしくは保護者がフィードバックすることで運動有能感が高まることを示唆しているが、学校と家庭が連携しながら、eポートフォリオを活用してフィードバックを行う実践はほとんどない。

2 研究の目標

eポートフォリオを活用した自己評価とフィードバックを行い、運動有能感を高める体育科学学習の在り方について明らかにする。

3 研究の仮説

eポートフォリオを活用して、撮影した動きと手本となる写真等や過去の動きを比較して自己評価させたり、撮影した動きを基に仲間や教師、保護者がフィードバックを行ったりすることで、身体的有能さの認知や統制感、受容感に作用し、運動有能感が高まるであろう。

4 研究の構想

(1) 内容

eポートフォリオを活用して、児童に自分の動きを自己評価させ、記録・整理した自分の動きや自己評価を基に仲間や教師、保護者がフィードバックを行うことで、運動有能感を高める体育科学学習の在り方を明らかにする。

(2) 手だて

ミライシード・オクリンク（以後オクリンク）を使用し、以下のような手だてを講じる。

① eポートフォリオを活用した自己評価

ア 撮影した動きと手本となる写真等を比較する

基本的に毎時間、授業中に撮影した動きと手本となる写真等を比較させ、動きを局面ごとに自己評価させる。

イ 過去の自分の動きと比較する

単元の途中にポートフォリオ検討会を行い、それまでに撮影した動きから、自分の動きの変容を自己評価させる。

② eポートフォリオを活用したフィードバック

ア 仲間からのフィードバック

活動中や毎時間の振り返りで、仲間が作成したeポートフォリオを基に、肯定的・矯正のフィードバックを口頭で伝えさせたりカードに記録させたりする。単元の中盤と終了後に行うポートフォリオ検討会では、肯定的フィードバックや矯正のフィードバックをカードに記入させる。

イ 教師からのフィードバック

2時間に1回、授業後に、児童が提出したeポートフォリオを基に、肯定的フィードバックや矯正のフィードバックをカードに記入し、当該児童に送信する。

ウ 保護者からのフィードバック

単元の中盤と終了後に、児童が作成したeポートフォリオを基に、肯定的フィードバックや矯正のフィードバックをカードに記入するよう依頼する。

(3) 検証の方法

① 検証内容

eポートフォリオを活用した自己評価とフィードバックは、運動有能感を高める上で有効であったか。

② 検証授業

○ 5年生（体育科） 6月～7月

○ 5年生（体育科） 8月～9月

③ 検証方法

○ 実践後の児童へのアンケート分析

・自己評価における課題解決方法の選択、運動の上達感へのつながり

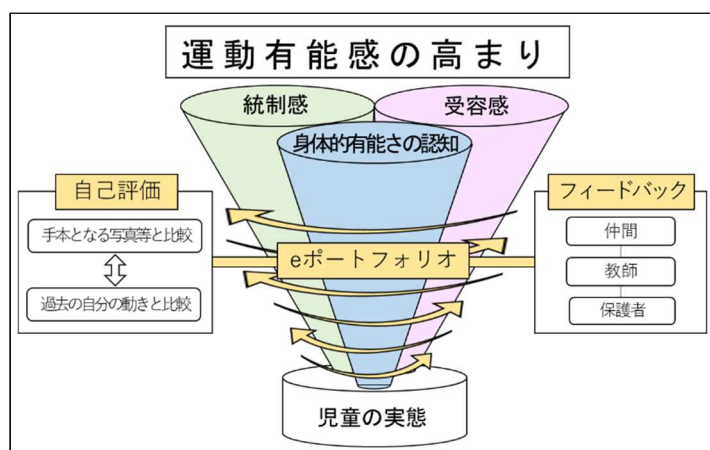
・仲間や教師、保護者からのフィードバックにおける課題解決方法の選択、運動の上達感へのつながり

○ 技能水準の変容

○ 実践前と実践後の運動有能感の変容

・岡澤ら（1996）によって作成された運動有能感測定尺度（3因子各4項目、計12項目）

5 研究構想図



6 研究の実践 実践1

第5学年 対象54人（2クラス）

単元名「のび伸びスイミング（水泳運動）」

(1) 実践1のねらい

① 研究のねらい

運動有能感を高めるために、水泳運動を行っている姿をeポートフォリオに記録・整理し、それを活用した自己評価とフィードバックの有効性を明らかにする。

主な学習活動	配時
教師が示した「水遊び」「もぐる・浮く運動」「浮いて進む運動」を一斉に行い、泳力調査をする。	1
自分の力に合わせて、「もぐる・浮く運動」「浮いて進む運動」をパディとともに行う。	1
自分の目標とする泳ぎに近付けるために、自分の課題に合わせた活動を選択し、パディと教え合いながら行う。	6

② 単元計画（全8時）

(2) 実際と考察

① 自己評価

ア 実際

第2時から第8時までの毎時間の活動の途中で、クラスの半数を一人ずつ泳がせ、教師がオクリンクのビデオ機能を用いて撮影した。撮影後、自己評価カード（【資料11】）を用い、自己評価カードの手本となる泳ぎの局面ごとの連続写真と見比べさせながら◎○△の3段階で自己評価をさせた。

クロール パディから（マイク）

点数	12	9~11	4~8	1~3	0
評価	A	B	C	D	E

今日の点数: 9 今日の評価(ABCD): B

け棒びでスタート 浮いてきたらバタ足 大きく水をかく うでまぐらで息つぎ 肘を高く 親指から入水

お手本 局面ごとの手本となる写真

◎ ○ △

【資料11】自己評価カード

児童は、自分の泳ぎの動画を手本となる写真と比べながら局面ごとに自己評価していた。

また、自己評価を基に次時に行う活動を選択させた（【資料12】）。

クロール・平泳ぎのキック（手かき・呼吸）で腕枕を完璧にする。

場	力だめしの場	課題解決の場
	25m	12.5m
練習方法の例	補助員を使って補助員を減らして補助員を使わずに	補助員を使って補助員を減らして補助員を使わずに
おすすめの補助員	ブレイク（後ろから見て） ブレイク（前から見て） ブレイク（横から見て）	ブレイク（後ろから見て） ブレイク（前から見て） ブレイク（横から見て）

今日の記録 150m 今日で腕枕が出来てきているので嬉しいです。

書いてら 書くなら

【資料12】課題解決活動の選択カード

第5時と第8時終了後には、帯タイム等を利用してポートフォリオ検討会を行い、これまで撮影した動画を見比べることで自己評価させた。第5時終了後の検討会では、これまでに上達したところと、できるようになりたいこと、そのために行う活動を記入させた（【資料13】）。

上達したところ（どこが どうなった）

足を体に引き付けることができた。

できるようになりたいこと（どこを どうする）

キックの時に、タイミングが少し早いしキックしたあとバタ足をしてしまうから次の時間になおしたい。

そのためにどうする

次の時間に、キックに集中して練習したい。

【資料13】ポートフォリオ検討会カード1（第5時終了後）

第8時終了後の検討会では、これまでの自己評価カードを全てつなげさせ（【資料14】）、単元を通して上達したところを記入させた（【資料15】）。

ポートフォリオ検討会

すべての動画をコピーして順番につなげましょう。

※2枚目から

【資料14】つなげたこれまでの自己評価カード

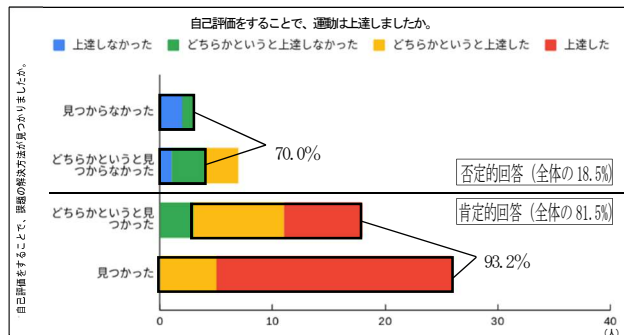
上達したところ（どこが どうなった）※パディと話し合う

1回目の撮影の時よりも腕が上に上がっていました。

【資料15】ポートフォリオ検討会カード1（第8時終了後）

イ 考察

自己評価によって課題解決方法の選択や運動の上達につながったかを尋ねたところ、課題解決方法の選択について肯定的回答をした児童が全体の81.5%で、そのうち93.2%が、運動の上達へのつながりについて肯定的回答をしていた（【資料16】）。



【資料16】自己評価に関する水泳運動事後アンケート結果

これら二つの Spearman の順位相関係数は 0.70 で正の相関があった ($p<0.01$)。これらのことから、自己評価が課題解決方法の選択につながり、運動の上達感につながったと考える。

一方、自己評価による課題解決方法の選択について否定的回答をした児童は全体の 18.5%で、そのうち 70.0%が運動の上達へのつながりについて否定的回答をしていた（【資料 16】）。このことから、課題解決方法が選択できなかった児童の多くは運動の上達感が低いといえる。原因としては、手本となるものが写真のみであったことから、一連の動作のイメージがしにくく、自分の課題を見付けることが難しかったことが推察される。

自己評価をする場面において、より課題解決方法の選択をさせやすくするためには、局面ごとの写真だけでなく、手本となる動画を提示し、一連の動作のイメージをもたせた上で自己評価をさせることが手だてとして考えられる。

② フィードバック

○ 仲間からのフィードバック

ア 実際

毎時間の振り返りを行う前に、記入した自己評価カード（【資料 11】）をバディに見せ、フィードバックを行わせた。第2時にはフィードバック用のカードにタイピングで記入させたが、第3時より時間短縮のために自己評価カードにオクリンクの音声入力機能を用いて記録させた（【資料 17】）。



【資料 17】自己評価カードに記録した仲間からのフィードバック（音声）

児童には肯定的フィードバックや矯正のフィードバックを行うよう留意させた。しかし、矯正のフィードバックについて、伝えるべきポイントが当該児童の課題からずれている児童も見受けられた。

また、第5時と第8時終了後に行ったポートフォリオ検討会では、これまでに撮影した動画をバディとともに見比べさせ、相手のカードにコメントを記入させた（【資料 18】）。

バディから

最初はあしとてがいっしょになっていたけど、いっしょになっていなかったから成長したと思う。

肯定的フィードバック

バディから

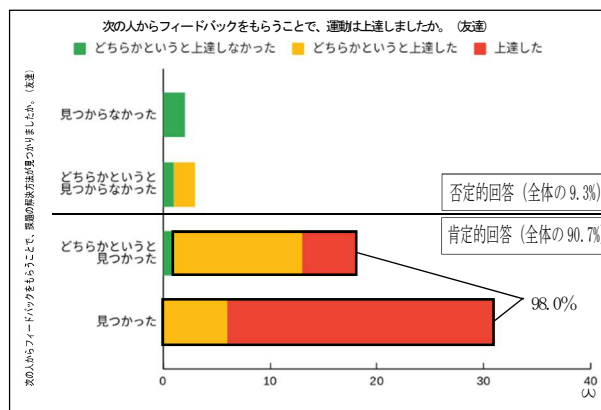
足の裏のところでハの字をつかって押すような感じで蹴るといいよ！

矯正のフィードバック

【資料 18】ポートフォリオ検討会カード2（第5時終了後）

イ 考察

仲間からのフィードバックによって、課題解決方法の選択や、運動の上達につながったかを尋ねたところ、課題解決方法の選択について肯定的回答をした児童が全体の 90.7%で、そのうち、98.0%が運動の上達へのつながりについて肯定的回答をしていた（【資料 19】）。



【資料 19】仲間からのフィードバックに関する水泳運動事後アンケート結果

これら二つの Spearman の順位相関係数は 0.65 で有意な正の相関があった ($p<0.01$)。これらのことから、仲間からのフィードバックが課題解決方法の選択につながり、運動の上達感につながったと考える。

しかし、矯正のフィードバックについて、伝えるべきポイントが当該児童の課題からずれている児童が見受けられたことから、一連の動きのイメージができていなかったり、適切な動きについての知識を習得できていなかったりしていることが考えられる。このことから、手本となる動きを局面ごとの連続写真で示すだけでなく、動画で確認させる等の手だてが必要だと考える。

○ 教師からのフィードバック

ア 実際

撮影を行った児童について、提出させた e ポートフォリオ（【資料 11】【資料 12】）を基に肯定的フィードバックや矯正のフィードバックを行った。フィードバックは、オクリンクで文章を書いたカード（【資料 20】）を当該児童に送信して行った。

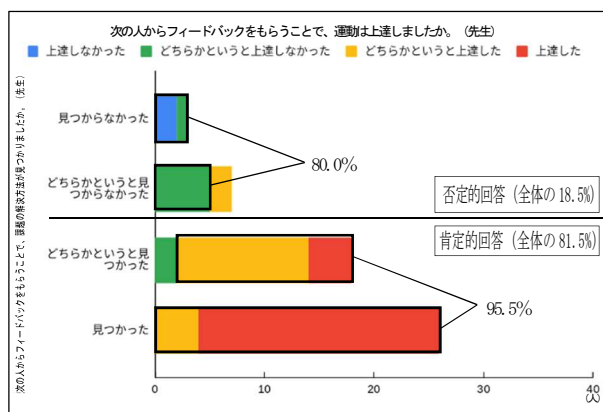
山下先生から（第6時）

息継ぎをうでをまくらにしているね。
キックを、ももから動かすようにすると、もっと
バランスよく泳げそうですね！

【資料 20】教師からのフィードバック

イ 考察

教師からのフィードバックによって、課題解決方法の選択や、運動の上達につながったかを尋ねたところ、課題解決方法の選択について肯定的回答をした児童が全体の 81.5%で、そのうち、95.5%が運動の上達へのつながりについて肯定的回答をしていた（【資料 21】）。



【資料21】教師からのフィードバックに関する水泳運動後アンケート結果

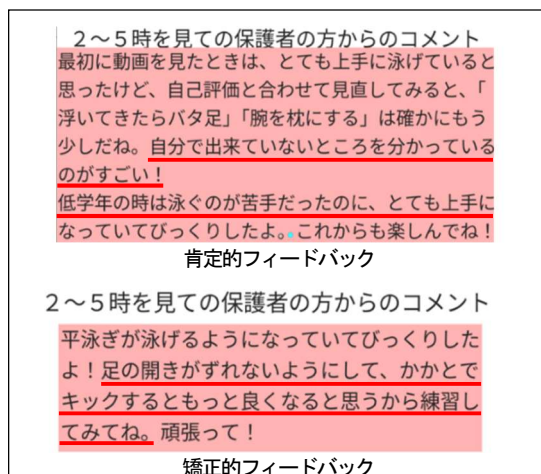
これら二つの Spearman の順位相関係数は 0.80 で有意な正の相関があった ($p<0.01$)。これらのことから、教師からのフィードバックが課題解決方法の選択につながり、運動の上達感につながったと考える。

一方、教師からのフィードバックによる課題解決方法の選択について否定的回答をした児童は全体の 18.5%であり、そのうち 80.0%が運動の上達へのつながりについて否定的回答をしていた (【資料 21】)。このことから、課題解決方法が選択できなかった児童の多くは運動の上達感が低いといえる。これは、【資料 20】のように教師からのフィードバックが文字によるものがほとんどで、課題となる動きを具体的に把握することが難しく運動の上達感につながらなかったためだと推察される。

○ 保護者からのフィードバック

ア 実際

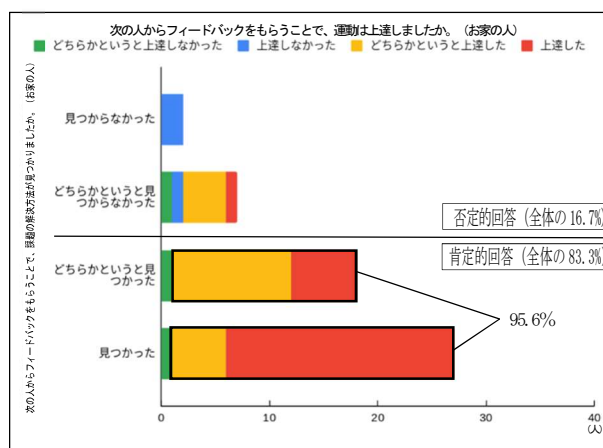
第5時と第8時終了後に、児童に Chromebook を持ち帰らせ、eポートフォリオを基に、保護者に肯定的フィードバックや矯正のフィードバックをオクリンクのカードに文章を記入するよう依頼した (【資料 22】)。授業に参加した全ての児童の保護者からフィードバックが得られた。



【資料22】保護者からのフィードバック

イ 考察

保護者からのフィードバックによって課題解決方法の選択や、運動の上達につながったかを尋ねたところ、課題解決方法の選択について肯定的回答をした児童が全体の 83.3%で、そのうち、95.6%が運動の上達へのつながりについて肯定的回答をしていた (【資料 23】)。



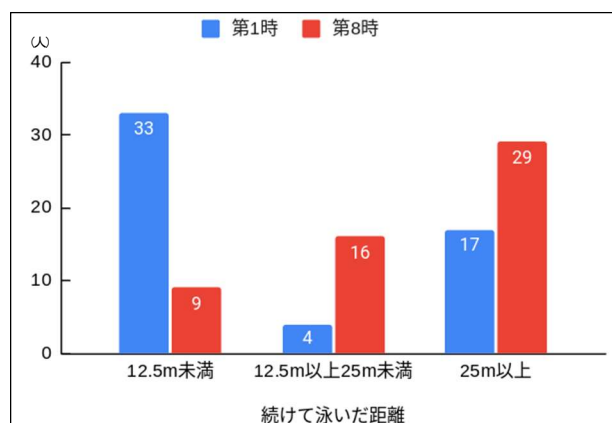
【資料23】保護者からのフィードバックに関する水泳運動後アンケート結果

また、これら二つの Spearman の順位相関係数は 0.58 で有意な正の相関があった ($p<0.01$)。これらのことから、保護者からのフィードバックが課題解決方法の選択につながり、運動の上達感につながったと考える。

(3) 実践1のまとめ

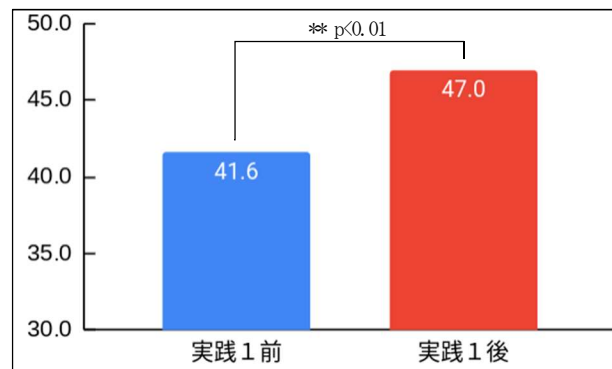
① 全体考察

まず、技能の変容について述べる。第1時と、第8時まで続けて泳いだ距離を調べたところ、第1時に 12.5m 未満の児童は 33 人であったのが第8時終了後には 9 人に減少し、12.5m 以上 25m 未満、25m 以上の人数が増加していたことから、一定の技能の高まりが見られた (【資料 24】)。



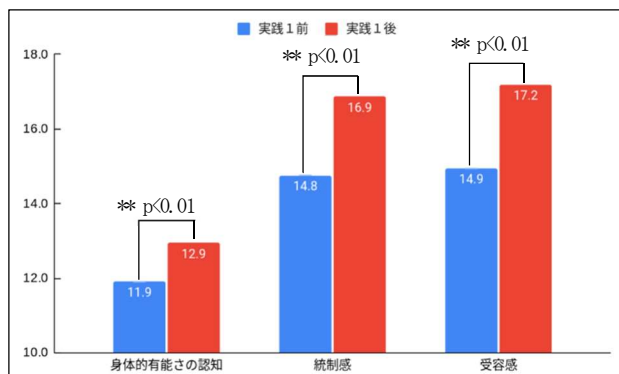
【資料24】実践1前後の泳力の変容

次に、運動有能感とその因子の変容について述べる。実践1前後の運動有能感の変容を調べたところ、実践1前は 41.6、実践1後は 47.0 で、Wilcoxon の符号付順位検定の結果、有意に高まっていることがわかった ($p<0.01$) (【資料 25】)。



【資料25】実践1前後の運動有能感の変容

運動有能感を構成する各因子の変容を調べたところ、実践1の前後において「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」のいずれの因子も、Wilcoxonの符号付順位検定の結果、有意に高まったことがわかった ($p<0.01$) (【資料26】)。



【資料26】実践1前後の運動有能感の各因子の変容

前項で述べた実際と考察から、e ポートフォリオを活用した自己評価と、仲間や教師、保護者からのフィードバックが課題解決方法の選択、さらに運動の上達感につながり、統制感や身体的有能さの認知が高まったことが考えられる。また、その過程で仲間や教師、保護者から肯定的・矯正的フィードバックを得たことで受容感が高まったことが考えられる。ただ、統制感と受容感に比べ、身体的有能さの認知における値の高まりが小さいのは、実践1前の身体的有能さの認知が他の因子に比べて低いことから、自分の運動技能を肯定する感覚が元々低いことが原因の一つとして推察される。そのため、技能の高まりをより認知させる自己評価やフィードバックの仕方の工夫が必要であると考えられる。

② 成果

- 水泳運動において e ポートフォリオを活用した自己評価やフィードバックが課題解決方法の選択、さらに運動の上達感につながり、身体的有能さの認知と統制感が高まった。
- 仲間や教師、保護者からの肯定的・矯正的フィードバックによって受容感が高まった。

③ 課題

- 自己評価において、自分の課題を見付けやすくするために一連の動作のイメージができるようにする必要がある。
- 仲間からのフィードバックにおいて、当該児童の課題に即した矯正的フィードバックをさせるために、正しい動きの理解を促す必要がある。
- 教師からのフィードバックにおいて、自分の課題を見付けやすくするために、視覚的なフィードバックを行う必要がある。
- 技能の高まりを認知させる自己評価やフィードバックを行う必要がある。

7 研究の実際 実践2

第5学年 対象55人(2クラス)

単元名「リズムに乗って、より高く！(走り高跳び)」

(1) 実践2のねらい

① 研究のねらい

運動有能感を高めるために、走り高跳びを行っている姿を e

ポートフォリオに記録・整理し、それを活用した自己評価とフィードバックの有効性を明らかにする。

② 単元計画(全6時)

主な学習活動	配時
走り高跳びを試しに行い、最初の記録を測る。	1
自分の記録を伸ばすために、自分の課題に合わせた活動を選択し、バディと教え合いながら行う。	5

(2) 実際と考察

① 自己評価

ア 実際

第2時から第6時までの毎時間の活動中に、バディ同士で互いの跳躍をオクリンクのビデオ機能を用いて撮影した(第3時は通信障害のため撮影なし)。撮影するタイミングは児童が選択できるようにしたが、ほとんどの児童は活動の終盤に教師の声掛けによって撮影を始めていた。撮影時、日光が画面に反射することで画面が見えづらくなり撮影に苦労する様子が見られた。撮影後、自己評価カード(【資料27】)を用い、自己評価カードの跳躍の局面ごとの手本となる連続写真と見比べさせながら◎○△の3段階で自己評価をさせた。

【資料27】自己評価カード

児童は、自分の跳躍の動画を手本となる写真と比べながら局面ごとに自己評価していた。

実践1の課題より、一連の動きのイメージをもたせた上で自己評価できるように、手本となる動画のリンクを自己評価カードに貼り付け、必要に応じて見ることができるようにした(【資料27 赤枠】)。その結果、活動中に必要に応じて手本となる動画を確認する児童が見られ、事後アンケートの結果、単元の間に手本となる動画を1回以上見た児童は74.5%であった。

また、児童が行った自己評価を基に次時に課題とする局面を選択させ(【資料28】)、それを解決するための場で活動を行わせた。

【資料28】課題解決活動の選択カード

しかし、ある程度記録が伸びた後に、記録が伸びにくくなり、課題の解決に苦勞する児童が多く見られた。

第4時と第6時終了後には、帯タイム等を利用してポートフォリオ検討会を行い、これまで撮影した動画を見比べることで自己評価させた。第4時終了後の検討会では、これまでに上達したところと、課題を記入させた（【資料29】）。

上達したところ（何が どうなった）※バディと話し合う 前よりもリズムよく助走ができていたところが良かったです。
課題（何を どうする） 上体を少し少なめに跳びたいと思います。

【資料29】ポートフォリオ検討会カード1（第4時終了後）

第6時終了後の検討会では、実践1の課題より、技能の高まりの認知をよりできるようにするために、第1時、第6時に絞って自己評価カードをつなげて比較させた（【資料30】）。その後、単元を通して上達したところを記入させた（【資料31】）。



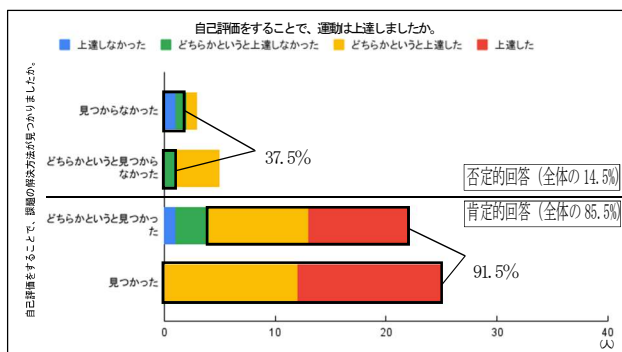
【資料30】第1時と第6時に絞ってつなげた自己評価カード

上達したところ（どこが どうなった）※バディと話し合う 1回目の撮影の時よりも腕が上に上がっていました。

【資料31】ポートフォリオ検討会カード1（第6時終了後）

イ 考察

自己評価によって課題解決方法の選択や運動の上達につながったかを尋ねたところ、課題解決方法の選択について肯定的回答をした児童が全体の85.5%で、そのうち91.5%が、運動の上達へのつながりについて肯定的回答をしていた（【資料32】）。



【資料32】自己評価に関する実践2事後アンケート結果

また、これら二つのSpearmanの順位相関係数は0.42であり、有意な正の相関が見られた ($p < 0.01$)。これらのことから、自己評価が課題解決方法の選択につながり、運動の上達感につながったと考える。

また、課題解決方法の選択について否定的回答をした児童は14.5%で、そのうち37.5%が運動の上達へのつながりについて否定的回答をしていた（【資料32】）。いずれの割合も、実践

1と比べて低くなっていることから、手本となる動画を提示し、一連の動作のイメージをもたせた上で自己評価をさせたことにより、自分の課題が明確になって課題解決方法の選択ができるようになり、運動の上達感が高まったと考えられる。

② フィードバック

○ 仲間からのフィードバック

ア 実際

毎時間の振り返りを行う前に、記入した自己評価カード（【資料27】）をバディに見せ、フィードバックを行わせた。フィードバックは自己評価カードにオクリンクの音声入力機能を用いて記録させた（【資料33】）。



【資料33】自己評価カードに記録した仲間からのフィードバック（音声）

児童には肯定的フィードバックや矯正のフィードバックを行うよう留意させた。また、実践1の課題より、手本となる動画を確認できるようにすることで一連の動きをイメージさせたり、適切な動きについての知識をもたせたりして、フィードバックが当該児童の課題からずれないようにした。しかし、伝えるべきポイントが当該児童の課題からずれている児童が見受けられた。また、当該児童の課題に対して適切な矯正のフィードバックが行われていても、単元が進むにつれて記録の更新が難しい児童が多く見られた。

また、第4時と第6時終了後に行ったポートフォリオ検討会では、これまでに撮影した動画をバディとともに見比べさせ、相手のカードにコメントを記入させた（【資料34】）。実践1の課題より、第6時終了後のポートフォリオ検討会では、全ての動画ではなく、第1時と第6時の動画を見比べさせて、バディにフィードバックをさせるようにした。

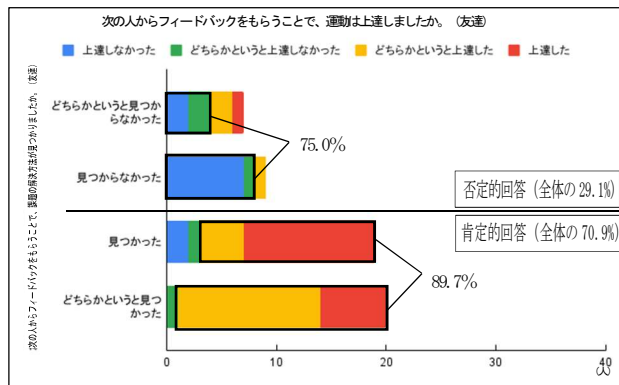
バディから 1, 2, 1, 2, 3で飛んだら高く飛べていたのが上達していると思いました 肯定的フィードバック
バディから 助走ができるようになったけど、着地のときに体が斜めってしまっているんで、そこを改善したら良いと思います。 矯正のフィードバック

【資料34】ポートフォリオ検討会カード2（第4時終了後）

イ 考察

仲間からのフィードバックによって、課題解決方法の選択や、運動の上達につながったかを尋ねたところ、課題解決方法の選択について肯定的回答をした児童が全体の70.9%で、そのうち、89.7%が運動の上達へのつながりについて肯定的回答を

していた（【資料35】）。



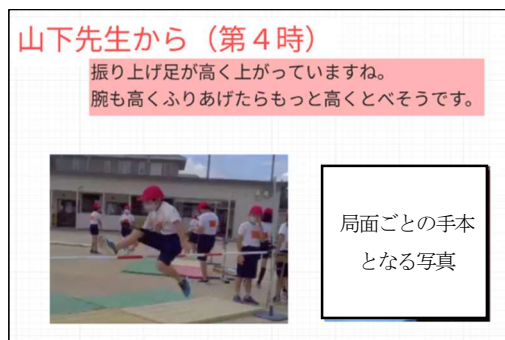
【資料35】仲間からのフィードバックに関する実践2事後アンケート結果

これら二つの Spearman の順位相関係数は0.60で有意な正の相関があった（ $p<0.01$ ）。しかし、実践1に比べて課題解決方法の選択について否定的回答をしている児童の割合が29.1%と増加し、そのうち75.0%の児童が運動の上達へのつながりについて否定的回答をしている。このことから、仲間からのフィードバックが課題解決方法の選択に役立った児童は運動の上達感につながっている一方で、課題解決方法の選択につながらなかったことで運動が上達しなかったと感じている児童も実践1に比べて多くいたことがわかった。

○ 教師からのフィードバック

ア 実際

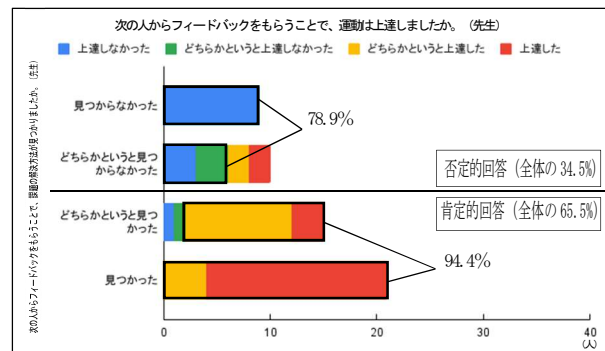
撮影を行った児童について、提出させたeポートフォリオ（【資料27】【資料28】）を基に肯定的フィードバックと矯正のフィードバックを行った。実践1の課題より、課題を見つけやすくしたり技能の高まりを認知させたりするために、児童が提出した動画をキャプチャしたものを用いてフィードバックを行った（【資料36】）。



【資料36】教師からのフィードバック

イ 考察

教師からのフィードバックによって、課題解決方法の選択や、運動の上達につながったかを尋ねたところ、課題解決方法の選択について肯定的回答をした児童が全体の65.5%で、そのうち、94.4%が運動の上達へのつながりについて肯定的回答をしていた（【資料37】）。



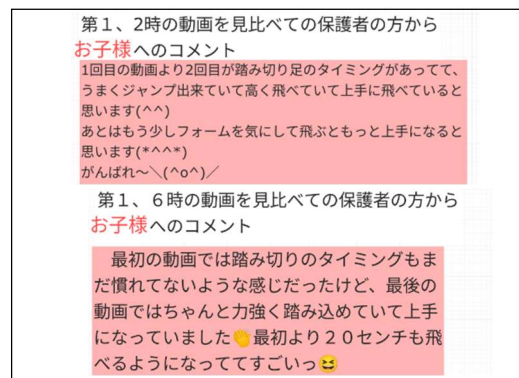
【資料37】教師からのフィードバックに関する実践2事後アンケート結果

これら二つの Spearman の順位相関係数は0.79で有意な正の相関があった（ $p<0.01$ ）。しかし、実践1に比べて課題解決方法の選択について否定的回答をしている児童の割合が34.5%と増加し、そのうち78.9%の児童が運動の上達へのつながりについて否定的回答をしている。このことから、教師からのフィードバック同様、教師からのフィードバックが課題解決方法の選択に役立った児童は運動の上達感につながっている一方で、課題解決方法の選択につながらなかったことで運動が上達しなかったと感じている児童も実践1に比べて多くいたことがわかった。

○ 保護者からのフィードバック

ア 実際

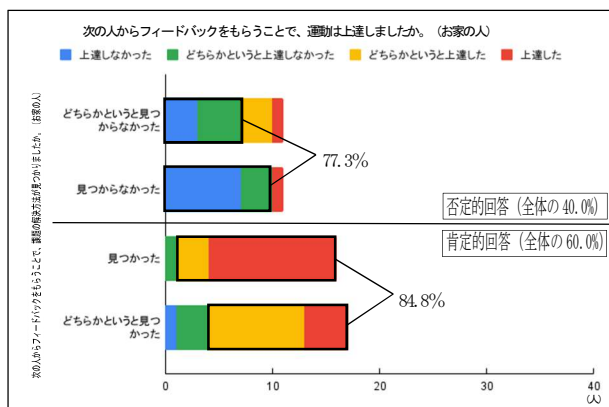
第4時と第6時終了後に、児童にChromebookを持ち帰らせ、eポートフォリオを基に、保護者に肯定的フィードバックや矯正のフィードバックをオクリンクのカードに文章を記入するよう依頼した（【資料38】）。授業に参加した全ての児童の保護者からフィードバックが得られた。



【資料38】保護者からのフィードバック

イ 考察

保護者からのフィードバックによって課題解決方法の選択や、運動の上達につながったかを尋ねたところ、課題解決方法の選択について肯定的回答をした児童が全体の60.0%で、そのうち、84.8%が運動の上達へのつながりについて肯定的回答をしていた（【資料39】）。



【資料39】保護者からのフィードバックに関する実践2事後アンケート結果

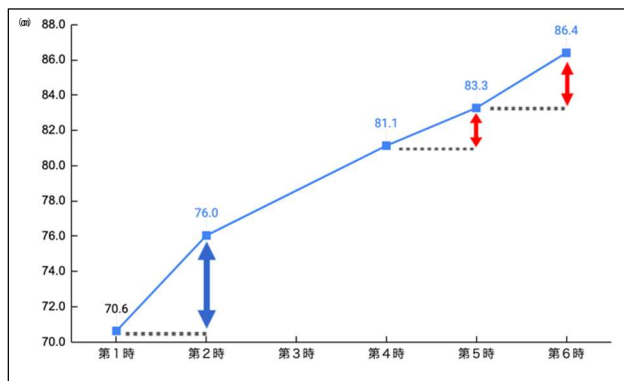
また、これら二つの Spearman の順位相関係数は 0.69 で有意な正の相関があった ($p<0.01$)。しかし、実践1に比べて課題解決方法の選択について否定的回答をしている児童の割合が 40.0%と増加し、そのうち 77.3%の児童が運動の上達へのつながりについて否定的回答をしている。このことから、教師や仲間からのフィードバック同様、保護者からのフィードバックが課題解決方法の選択に役立った児童は運動の上達感につながっている一方で、課題解決方法の選択につながらなかったことで運動が上達しなかったと感じている児童も実践1に比べて多くいたことがわかった。

(3) 実践2のまとめ

① 全体考察

ア 技能の変容

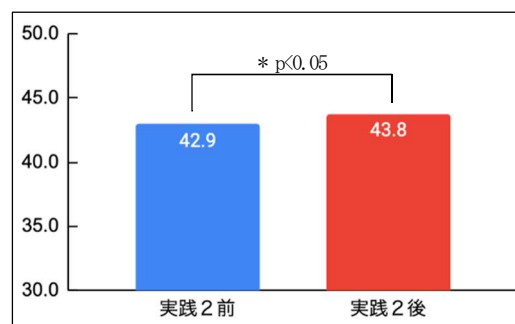
第1時の記録の平均は 70.6cm、第6時までの最高記録の平均は 86.4cm であり、一定の技能の高まりが見られた。しかし、単元が進むにつれ、記録の伸びが小さくなる傾向が見られた（【資料40】）。



【資料40】実践2の平均記録の変容

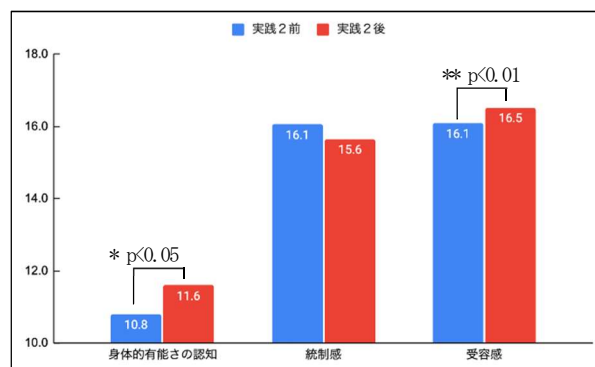
・ 運動有能感の変容

実践2前後の運動有能感の変容を調べたところ、実践2前は 42.9、実践2後は 43.8 で、Wilcoxon の符号付順位検定の結果、有意に高まったことがわかった ($p<0.05$)（【資料41】）。



【資料41】実践2前後の運動有能感の変容

運動有能感を構成する三つの因子の変容を調べたところ、実践2前後で「身体的有能さの認知」と「受容感」で、Wilcoxon の符号付順位検定の結果、有意に高まったことがわかった ($p<0.01$)（【資料42】）。



【資料42】実践2前後の運動有能感の各因子の変容

イ 身体的有能さの認知

身体的有能さの認知の高まりについて、まず、自己評価の観点から述べる。自己評価は課題解決方法の選択、さらに運動の上達感につながった。このことから、一連の動きのイメージをもった上で、自分の動きを評価し、課題解決方法の選択をしていく中で技能の上達を感じたことが身体的有能さの認知に作用していると考えられる。

また、実践1では身体的有能さの認知の伸びが三つの因子の中で最も小さかったが、実践2では最も大きかった。このことから、ポートフォリオ検討会において、第1時と第6時の動画を見比べさせ、動きの変容から自己評価させたことで、より技能の高まりが認知できるようになり、身体的有能さの認知に作用した可能性がある。

次に、フィードバックの観点から述べる。教師からのフィードバックで、児童が撮影した動画をキャプチャして技能の高まりを視覚的に捉えさせたことが、身体的有能さの認知に作用した可能性が考えられる。

一方、仲間や教師、保護者からのフィードバックが課題解決方法の選択や運動の上達につながっていないと感じている児童が多くいることから、それぞれの矯正のフィードバックが身体的有能さの認知に作用したとは考えにくい。しかし、仲間や教師、保護者からの肯定的フィードバックが身体的有能さの認知に作用した可能性が考えられる。

ウ 受容感

受容感の高まりについて、自己評価とフィードバックの観点から考察する。実践1同様、e ポートフォリオとして記録・整

理した自分の動きや自己評価を基に、仲間や教師、保護者から肯定的フィードバックや矯正のフィードバックを繰り返し得たことが受容感に作用していると考えられる。

また、実践2では、技能の高まりに伴い、ある程度までは記録の伸びが見られたが、それ以降は伸びにくくなった児童が多く見られた（【資料 40】）。このことから、運動の記録の伸び方に関わらず、フィードバックを行ったこと自体が受容感に作用していると考えられる。

エ 統制感

統制感が有意に高まらなかったことについて、自己評価とフィードバックの観点から考察する。実践2では自己評価が課題解決方法の選択や運動の上達感につながったのに対して、全てのフィードバックで課題解決方法の選択につながっていない児童が多く見られた。自己評価によって課題解決方法が選択でき、いずれかのフィードバックでは課題解決の方法が選択できなかった理由を問う児童へのアンケート結果では、「どこがいけないかはわかったけれどそこをどう改善したらいいかわからなかった」「あまりコツがわからなかった」等、課題はわかったが、具体的な解決方法はわからなかったという趣旨の回答が29.3%で最も多かった。しかし、課題に対する解決方法は提示していたことから、以下の二つが原因として考えられる。

・ 課題解決方法の提示の仕方

走り高跳びの運動の構造的特性上、例えば振り上げ足を高く上げることが課題とした場合、助走や踏み切りといった、その前までの局面に原因がある場合があるように、児童が課題とした局面と、課題の原因となる局面が異なることがある。しかし、実践2では、課題解決方法の選択肢として、運動局面を助走、踏み切り、振り上げ足、抜き足の四つに分け、課題とする局面に対応した解決方法を選択させるようにした。このことから、適切な課題解決方法を提案する矯正のフィードバックができなかった可能性が考えられる。よって、運動の構造的特性を踏まえて課題解決方法の提示の仕方を工夫し、運動局面の課題を順番に解決するように指導する等、適切な課題解決方法を選択しやすくした上で矯正のフィードバックを行う必要があると考える。

・ 記録の伸びの停滞

単元の後半では記録が伸びにくくなった（【資料 40】）ことから、仲間や教師、保護者からの矯正のフィードバックによって適切な課題解決方法を選択できていても、その解決方法が適切であることを実感することができなかったことが考えられる。よって、運動の記録の伸び方を考慮して、記録の伸びだけではなく、フォーム等の改善をより重点として肯定的フィードバックをしたり、毎時間の記録の伸びを視覚化する等の工夫をして記録の伸びをより認知できるようにした上で肯定的フィードバックをしたりする必要があると考える。

② 成果

○ 走り高跳びの自己評価において、手本となる動画を確認できるようにして一連の動作のイメージをもたせ、より課題解決方法の選択ができるようにしたり、初めと終わりの動画を比較させたりすることで、身体的有能さの認知が高まること

○ フィードバックを視覚的にすることや、仲間や教師、保護者からの肯定的フィードバックによって、身体的有能さの認知が高まることがわかった。

○ 運動の記録の伸び方に関わらず、e ポートフォリオを活用した仲間や教師、保護者からのフィードバックが受容感を高めたと考えられる。

③ 課題

● 運動の構造的特性を踏まえ、課題解決方法の提示の仕方を工夫し、運動局面の課題を順番に解決するように指導する等、適切な課題解決方法を選択しやすくした上で矯正のフィードバックをする必要がある。

● 運動の記録の伸び方を考慮し、記録の伸びだけではなく、フォーム等の改善に重点を置いて肯定的フィードバックをしたり、毎時間の記録の伸びを視覚化する等の工夫をして記録の伸びをより認知できるようにした上で肯定的フィードバックをしたりする必要がある。

8 研究のまとめ

① 研究を通じて

ア 運動有能感とその因子の変容

運動有能感は、実践1と実践2の前後で有意に高まった（【資料 43】）。運動有能感を構成する三つの因子については、実践1と実践2で共通して身体的有能さの認知と受容感に有意な高まりが見られ、実践1のみで統制感の高まりが見られた（【資料 43】）。

	身体的有能さの認知	統制感	受容感	運動有能感
実践1	○	○	○	○
実践2	○	-	○	○

○：有意な高まりあり -：有意差なし

【資料 43】 実践1、実践2前後の運動有能感の三つの因子の変容

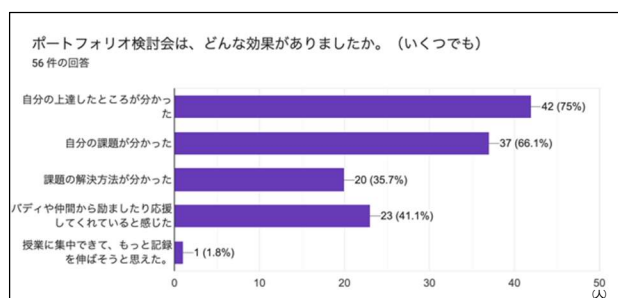
イ 身体的有能さの認知

まず、自己評価との関わりについて考察する。実践1と実践2で共通して自己評価が課題解決方法の選択、さらに運動の上達感につながり、身体的有能さの認知も有意に高まった。このことから、自分の動きを撮影した動画と局面ごとの連続写真を見比べて自己評価し、課題解決方法の選択をしていく中で技能の高まりを認知したことが、身体的有能さの認知を高めることがわかった。

また、実践1では身体的有能さの認知の伸びが三つの因子の中で最も小さかったが、実践2では最も大きかった。このことから、実践2のみで行った、手本となる動画を確認できるようにして一連の動きのイメージをもった上で自己評価させることは、より身体的有能さの認知を高める上で有効であることが考えられる。

ポートフォリオ検討会に関しては、実践後に行ったアンケートで、多くの児童がポートフォリオ検討会で自分の運動技能の

上達を感じていることがわかった（【資料 44】）。



【資料 44】実践後のポートフォリオ検討会に関するアンケート結果

このことから、e ポートフォリオとして記録・整理した自分の動きや自己評価を見比べさせて改めて自己評価させることは、技能の上達を認知させ、身体的有能さの認知を高めることが示唆された。これに関して、実践 2 の身体的有能さの認知の伸びが三つの因子の中で最も高いことから、実践 2 のみで行った、単元の初めと終わりの動画に絞って比較させることで、より身体的有能さの認知が高まることが考えられる。

次に、フィードバックとの関わりについて考察する。実践 1 では仲間や教師、保護者からのフィードバックが、課題解決方法の選択、さらに運動の上達感につながり、身体的有能さの認知も有意に高まった。しかし、実践 2 では、全てのフィードバックが課題解決方法の選択や運動の上達に有効に働いていないと感じている児童が実践 1 に比べて多かったにも関わらず、身体的有能さの認知が有意に高まった。これらのことから、矯正のフィードバックが身体的有能さの認知の高まりと関係があるとは考えにくい。よって、e ポートフォリオを活用した仲間や教師、保護者からの肯定的フィードバックが身体的有能さの認知を高めたと推察される。また、実践 2 では身体的有能さの認知の高まりが三つの因子の中で最も大きかったことから、児童の動きのよさを写真で示して、技能の高まりを視覚的に捉えさせることで、より身体的有能さの認知が高まることがわかった。

ウ 受容感

自己評価とフィードバックの両面から考察する。実践 1 と実践 2 で共通して受容感が有意に高まったことから、e ポートフォリオとして記録・整理した自分の動きの動画や自己評価を基に、仲間や教師、保護者から肯定的フィードバックや矯正のフィードバックを繰り返すことで、受容感が高まることがわかった。

また、走り高跳びの記録の伸び方を踏まえると、運動領域に関わらず、e ポートフォリオを活用した自己評価を基にフィードバックを行うこと自体が受容感に作用することが考えられる。

エ 統制感

自己評価とフィードバックの両面から考察する。統制感の高まりと、自己評価とフィードバックの課題解決への有効性との関係について【資料 45】に示した。統制感は、実践 1 で有意に高まったが、実践 2 では有意に高まらなかった。自己評価は、実践 1 と実践 2 で共通して課題解決方法の選択、運動の上達感につながった。一方で全てのフィードバックにおいては、実践 1 では課題解決方法の選択、運動の上達感につながったのに対

して、実践 2 では課題解決方法の選択につながっていない児童が実践 1 に比べて多く見られた。

	実践 1	実践 2
統制感の有意な高まり	○	×
自己評価の課題解決方法の選択、運動の上達感へのつながり	○	○
全てのフィードバックの課題解決方法の選択、運動の上達感へのつながり	○	×

【資料 45】統制感の高まりと、自己評価とフィードバックの課題解決への有効性

これらのことから、e ポートフォリオを活用した自己評価を行い、それを基にしたフィードバックによって課題解決方法を適切に選択させることができれば、統制感が高まることがわかった。

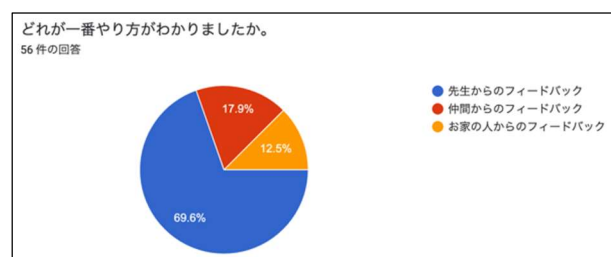
また、実践 2 で統制感が高まらなかった原因として課題解決方法の提示の仕方や記録の伸びの停滞が考えられることから、以下の手だてを行うことで統制感に作用することが示唆された。

- 運動の構造的特性を踏まえて課題解決方法の提示の仕方を工夫し、適切な課題解決方法を選択しやすくした上で矯正のフィードバックをすること。
- 運動の記録の伸び方を考慮して、記録の伸びだけではなく、フォーム等の改善をより重点として肯定的フィードバックをしたり、毎時間の記録の伸びを視覚化する等の工夫をして記録の伸びをより認知できるようにした上で肯定的フィードバックをしたりすること。

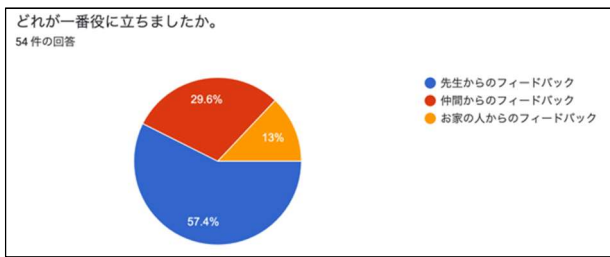
オ 運動有能感

実践 1 と実践 2 で共通して運動有能感が有意に高まったことより、e ポートフォリオを活用した自己評価とフィードバックによって、運動有能感が高まることがわかった。また、運動有能感を構成する三つの因子のうち、身体的有能さの認知と受容感とは実践 1 と実践 2 で共通して高まったことから、e ポートフォリオを活用した自己評価とフィードバックは、運動領域に関わらず、身体的有能さの認知と受容感に作用することで運動有能感が高まることがわかった。統制感については、実践 1 のみで高まったことから、課題解決方法の提示の仕方や記録の伸び方に影響されることが示唆された。

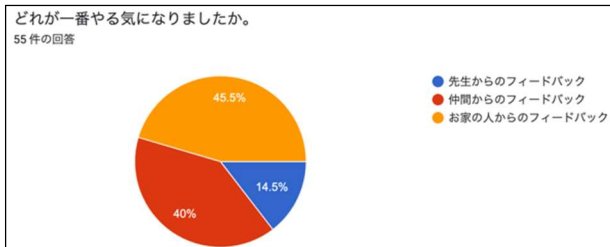
また、フィードバックに関して、実践後に行ったフィードバックに関するアンケート結果を以下に示す。



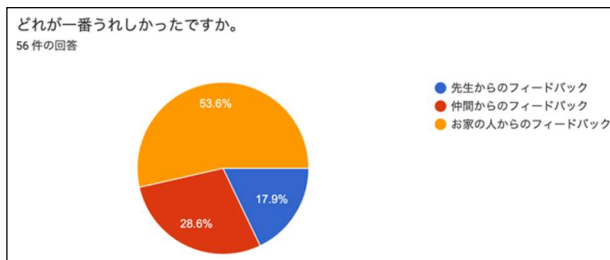
【資料 46】実践後のフィードバックに関するアンケート結果①



【資料 47】実践後のフィードバックに関するアンケート結果②



【資料 48】実践後のフィードバックに関するアンケート結果③



【資料 49】実践後のフィードバックに関するアンケート結果④

【資料 46】【資料 47】より、教師からのフィードバックは、最も「やり方」がわかり、「役に立つ」ものであったことから、身体的有能さの認知や統制感に深い関係があることがわかる。また、【資料 48】より、保護者や仲間からのフィードバックは、特に「やる気」につながるものであることがわかった。運動への「やる気」は、「やればできる、努力すればできる」という感覚につながる事が考えられるため、保護者や仲間からのフィードバックは統制感に深い関係があるといえる。そして、【資料 49】より、保護者からのフィードバックは最も「嬉しさ」を感じるものであったことから、受容感に深い関係があることがわかる。

これらのことから、仲間や教師、保護者からのフィードバックは、児童にとってそれぞれ異なる影響があることがわかった。特に、保護者からのフィードバックは、単元の中で2回のみであったにもかかわらず、児童にとって最も「やる気」になり、「嬉しさ」を感じるものであったことから、統制感や受容感を高めるのにとても有効であることがわかった。

また、城間（2010）は、運動有能感の因子同士が相互に影響を及ぼし合っている可能性が考えられることを述べており、「『統制感』や『受容感』の高まりが『身体的有能さの認知』を高めることは容易に想像できる」としている。このことから、保護者からのフィードバックによって統制感や受容感が高まり、そのことが身体的有能さの認知の高まりにもつながることが考えられる。つまり、保護者からのフィードバックは運動有能感を高めるための鍵になるといえる。

今後は、自己評価や仲間や教師、保護者からのフィードバックにおける、運動有能感を構成する三つの因子への作用の仕方

を考慮し、その内容や回数について検討していく必要がある。

② 研究の成果

- e ポートフォリオを活用した自己評価において、児童が撮影した動画と連続写真を見比べさせることで、課題解決方法が選択でき、技能の高まりを認知させ、身体的有能さの認知に作用して運動有能感を高めることがわかった。また、単元の初めと終わりの動画を比較して自己評価をすることが身体的有能さの認知に作用し、運動有能感を高めることがわかった。
- e ポートフォリオを活用した自己評価とフィードバックにおいて、児童が記録・整理した自分の動きの動画や自己評価を基にして、仲間や教師、保護者が肯定的フィードバックを行うことが、身体的有能さの認知に作用し、運動有能感を高めることがわかった。その際、肯定的フィードバックを視覚的に行うことが有効であることがわかった。
- e ポートフォリオを活用した自己評価とフィードバックにおいて、児童が記録・整理した自分の動きや自己評価を基にしてフィードバックを行い、課題解決方法を適切に選択できれば、統制感に作用し、運動有能感を高めることがわかった。
- e ポートフォリオを活用した自己評価とフィードバックにおいて、e ポートフォリオとして記録・整理した自分の動きや自己評価を基に、仲間や教師、保護者から肯定的フィードバックや矯正のフィードバックを繰り返し受けることで、運動領域に関わらず受容感に作用し、運動有能感を高めることがわかった。特に、保護者からのフィードバックが統制感や受容感を高めるのに特に有効であり、運動有能感を高めるための鍵になることがわかった。

③ 研究の課題

- 運動領域に関わらず統制感を高められるように、運動の構造的特性を踏まえた課題解決方法を提示し、適切な課題解決方法を選択しやすくした上で矯正のフィードバックをする必要がある。
- 運動領域に関わらず統制感を高められるように、運動の記録の伸び方を考慮して、フォーム等の改善をより重点として肯定的フィードバックをしたり、毎時間の記録の伸びの視覚化する等の工夫をして記録の伸びをより認知できるようにした上で肯定的フィードバックをしたりする必要がある。
- 自己評価と仲間や教師、保護者からのフィードバックの運動有能感への作用の仕方を考慮し、その内容や回数について検討していく必要がある。

引用文献

- 1 文部科学省 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）P142 東洋館出版社 （2018）
- 2 福岡市教育委員会 第 2 次福岡市教育振興基本計画 P13、P32 （2019）
- 3 福岡市教育委員会 令和 3 年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査について P4、5、7 （2022）
- 4 K. A. Klint, M. R. Weiss (1987) Perceived competence and motives

for participating in youth sport: a test of Harter's competence motivation theory. Journal of Sport Psychology:9 P55-65

- 5 岡沢祥訓／北真佐美／諏訪祐一郎 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究 スポーツ教育学研究16 (2) P147-148 (1996)
- 6 田中耕治 教育評価 P125 岩波書店 (2008)
- 7 大後戸一樹 小学校体育授業における運動技能の自己評価に関する事例的研究—教師による評価と児童の自己評価に着目して— 広島大学院教育学研究科紀要 第一部 第 59 号 P115 (2010)
- 8 田中耕治 よくわかる教育評価 (第2版) ミネルヴァ書房 P58 (2010)
- 9 高橋健夫／岡澤祥訓／中井隆司／芳本真 体育授業における教師行動に関する研究 教師行動の構造と 児童の授業評価との関係 体育学研究 36 (1991)
- 10 城間朝司 運動有能感を高める学習指導の工夫—水泳運動における学び合いを通して (第4学年) — 沖縄県立総合教育センター 前期長期研修員 第 48 集 研究収録 P2 (2010)

参考文献・参考資料

- 1 高橋健夫／岡沢祥訓／中井隆司 教師の「相互作用」行動が児童の学習行動及び授業成果に及ぼす影響について 体育学研究 34 (1989)
- 2 上江洲隆裕／岡澤祥訓／木谷博記 教師の言語活動による「継続的フィードバック」が技能成果、運動有能感に及ぼす影響に関する研究—走り幅跳びの授業実践を通して— 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 (2011)
- 3 外山良史／水落芳明 小学校体育学習における学習者相互の継続的フィードバックが運動有能感に与える影響に関する事例的研究 上越教育大学教職大学院研究紀要 (2015)
- 4 スポーツ庁 令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果 (2021)

「ミライシード・オクリンク」は株式会社ベネッセコーポレーションの商標登録です。